

SONRISA

# そんりさ

Vol.138

パナマ先住民族

ンガベとブグレ



エルサルバドル難民が住んでいたホンジュラス・コロモンカグア  
難民キャンプ。トマトの配給を喜ぶ子どもたち。1989年1月

- 02 パナマ先住民族ンガベとブグレ ……翻訳ワークショップ  
06 サルバドル難民と四国の山村の自立の思想 ……藤井 満  
11 ロサリーナ・トゥユクさんインタビュー ……松枝 愛  
13 アルゼンチン「人道に対する罪」を裁く努力 ……井上 薫  
14 ラ米百景「カルロス・フエンテスの思い出」 ……伊高浩昭  
15 ケチュア語詩集「アイランプ」より ……栗原重太  
16 音楽三味♪ペルーな日々「アンカシュの歌声」 ……水口良樹  
18 メキシコ食巡り「アボカドソース豚肉タコス」…ミゲル・アクーニャ  
19 ニュースクリップ ……サザエ

# 隠された歴史の物語      ンガベとブグレ

ホルヘ・サルサネーダス（パナマ先住民族司牧会メンバー）

パナマの人口の12パーセントは先住民族である。その中にンガベ民族とブグレ民族を含む7つの民族がいる。国内の5つの先住民族居住地域（コマルカ）には、水力発電のための国内最大の森林と水源が保持されている。私たちは、先住民の土地をめぐる政府との紛争のなかで起こった、パナマ政府に対するンガベの人達の抵抗と、政府による生々しい弾圧の状況を報告したい。この闘いの中で、先住民族に対する差別と排除の歴史の原因の根深さが明らかになったからだ。

ノーム・チョムスキーは著名な歴史家ハワード・ジンに敬意を表し、「歴史外」の出来事について語っている。それは市場経済を基準にした歴史では重要とされない出来事や人々のことである。だが実際は、彼らこそが歴史を作っているのである。

パナマでは気の遠くなるほど前から、これらの「歴史外」の人達に関するドラマが繰り返されてきた。勝利者達（今ではフリゲート艦オデッセイに積まれていた大金の持ち主といわれている）の年代記では、ンガベの首長ウラカについて、侵入者を倒せなかったことを苦にして、自分の土地で死んだと語っている。その土地とは、まぎれもなく今日でもンガベとブグレの人達が、カナダとパナマの強欲な鉱山業者の略奪から守ろうとしている土地だ。

## 2012年2月 待ちくたびれて

ンガベは1年間待ったが、もう待つのにうんざりしていた。その間にもいくつかの新しい約束が結ばれたが、その多くは「よしよかった。でも今はまだ駄目だ」というものだった。そして、我慢の限界がきた時、ンガベはパンアメリカン・ハイウェイを封鎖した。そして6日が過ぎた。この馬鹿な酔っ払いを疲れ

させればいい、という作戦を立てた政府は気づいていなかった。自分たちの相手が、何年も我慢し待ち続けた年月の重みを肩に背負っているということに。

ついにパナマ軍（法的にはパナマに軍隊は存在しないが）は、大規模な軍事作戦をとって先住民に襲いかかった。2人が死亡、多くの負傷者・逮捕者を出した。レイプされた女性たちもいた。

司祭、シスター、司教を通じて、カトリック教会が仲裁に入った。対話はあったが、相当混乱していた。政府は「付帯地域」について語り、議員と大臣は「インディオ」達は水力発電所建設で得をしたいがために、電気料金をもっと上がればよいと思っているのだ、と言って先住民を愚弄した。最悪なのは、パナマにはこんな戯れ言を信じる人がいるということだ。

「付帯地域」と呼ばれるところ（セロ・ペラード、エル・バレ、アルト・デ・ヘススなど）は1997年に承認されたコマルカに属しており、何ら新しいものではない。これらの地域は「飛び地」になっていて、コマルカの領域と地続きではないが、れっきとしたコマルカの一部である。1997年にコマルカを認定した法令10は、当時の政府が決めたもので、その地域がかなり狭められた。その上、多くのンガベやブグレのコミュニティがコマルカの外に置かれた。コマルカ・エンベラ - ウオウナーンでも同じことが起こっている。これらのコミュニティはコマルカに隣接しているのに、経済的・政治的利益のため境界の外側に追いやられている。先住民の利益などは考慮されていない。

外側にあると隣にあると、コミュニティは尊重されなければならない。すべての国際的な規範は（政府が批准しなかった「ILO169号条約」も）そのプロジェクトがコミュニティに影響を与える場合は、事前に十分な情報が公開された上で自由な協議をすると謳っている。これは、建設中のバロ・ブランコ

水力発電所のケースでは実行されなかった。しかも、政府が熱望し告示したこの水力発電所は、実際には不要だったという情報もある。

## 1803年当時から そしてずっと以前からも

1893年9月、パナマの司教にペニャ・ブランカから手紙が届いた。差出人はバシリオ・ルイス・スルドという男性で、彼は次のように告発した。「トレ村の村長は山に農場を持っていたが、この農場の近くに住む先住民の家畜をすべて奪った。そして、私の家族をひどい目にあわせ、理由なく人々をくびきかけた。さらにインディオとの混血の女性に性的暴行を加えた。村長は先住民の汗を吸って金持ちになった」と。

この告発は「最近の」訴えのように聞こえるが、1世紀以上前から（そしてもっと以前から）この地域のンガベの人達は、闘い、訴えてきたのだ。問題は聞く耳を持たなかった我々の方にある。

## 1950年から75年 略奪と人種差別主義

トレ（チリキ）のラティーノ（非先住民）が、イビアラボッダ（現在のコマルカ）のコミュニティの15haの土地を自分の物にした。彼は、土地は耕す人もなく放置されていたと主張したが、人々はみな、その土地がどの家族のものかを知っていた。このことは1950年8月に報告された。また別の非先住民は、同じコミュニティ内の別のンガベの土地を、ポンチョ1枚で手に入れた。この時代には、土地が1袋の塩と交換されたというような話は他にもいっぱいある。

この地域の先住民の土地に対して、犯罪的に繰り返されてきた略奪について話せばキリがない。それでも、ついに我々は、政府に先住民の土地の境界を定めることを了承させる瞬間を迎えた。すでにその面積はかなり狭くなってはいたけれど。

1975年、トレのある男性は、コマルカの近くに一定期間住んだことを根拠に、私にこう言った。「先住民の考え方をやめさせるには、数人の大学生に交わ

らせることだ、そうすればすぐ考え方をを変えるだろう」と。

私は彼の言葉に吐き気をもよおした。とんでもないことに、この男は教育省内の地位についていた。もう植民地時代ではないというのに。私はコマルカ内のこの地域の土地問題を調査をしていた時にこの話を聞いた。それで、この地域の多くの牧場主の、あまりにひどい民族差別主義的な、絶対にキリスト教的ではない行動に合点がいったのだった。

## 1979年 18年間待ち続けて

1979年3月、政府の大臣が自信ありげに言った。「本当に間もなく、君たちは間違いなく自分たちの土地を手に入れるだろう」と。村は熱狂的な拍手に沸いた。私は信じられなかった。そんな素晴らしいことが本当にあり得るのか、彼の言うことを信じてもいいのか、と自問した。

その年、私はクリカモラ（コマルカ・ンガベ）の密林の真ん中のカンキントウにある、全ンガベ民族会議に出席した。山を越えて仲間と一緒に4日間歩いてたどり着いた。到着した時はへとへとだったが、32歳でそこまで踏破できたことが嬉しかった。私は、コマルカ法の承認によって先住民の土地が守られ、ゼロ・コロラドの金や銅の採掘が防げるという幻想を持っていた。

政府が譲歩すると信じた私はなんと甘かったのだろう。実際にその土地がンガベのものになるのに、さらに18年かかった。しかもンガベが要求していた土地よりもずっと小さく、多くのコミュニティはコマルカの外へ取り残されることになった。

1990年10月、私が学校で子どもたちとンガベ語で話すのを見て、1人の女性教師が無邪気に尋ねた。「あなたは話せるんですか？ 私は7年もここにいるけれど、ここの言葉であいさつもできないのに」

この教師は例外ではない。コマルカ・ンガベブグレの中で、どれだけ学校がバイリンガル教育を実施

し、何人のバイリンガル教師が育成されているのだろう。パナマの先住民の7言語とその文字が法で認められたのもようやく2010年になってからだ（法令88）。圧力をかけ、何年も抗議行動をしないと認められないのか！

## 1997年3月 忘れられない日

パナマ人の多くが97年3月7日という日付を覚えているかわからないが、ンガベとブグレにとっては忘れられない日だ。この日ついにコマルカが法律的に認められたのだ。その時のガヌザ司教の言葉は本当に美しく預言的だった。

神よ、すべての民族の父、母よ。今日、私はンゴボとチュベの名においてあなたに感謝します。我々の祖先がいつもあなたに感謝し、加護を求めてきたように。あなたは、川や谷、小川や雲、太陽と月を創られました。あなたは空の水瓶を割って、豊富な水を森や農地に注いでくれます。あなたが最初の男と女を創り、そして彼らが基となり、この土地や川にたくさんの住民が生まれました。それがあなたの息子、ンガベとブグレです。そして、鹿が走り野ウサギが隠れているこの自然の王国を守り大切にしようと命じられました。この地面の下には貴重な金属が眠っていますが、それはあなたからの贈り物、民族の財産です。あなたはおっしゃいました。風のささやきを聞きながら土地を耕し、文化を育て、仲間みんなと手を取り合って、自分たちらしく生きるようにと。

## 2003年まだ圧力もなく

私は長く続く丘を登っていた。もう我慢の限界だった。30メートルごとに立ち止まり深呼吸をした。シスターのひとりには私の100メートル先を歩いていたが、もうひとりには姿も見えなかった。サンタフェに着いた時は5時間も遅れていた…。私はもう30歳ではなく、そのほぼ倍の年齢だった。私たちはアルト・オ

ルティガ（ベラグアスのサンタフェ）のコミュニティにある布教センター「ベアタ・ラウラ・モントーヤ」からやって来た。そこでは2001年からラウラ修道会が活動していた。私たちは、コマルカ・ンガベ・ブグレの第10法令について2日間のワークショップを開いた。

ワークショップが始まり、私がンガベ語で話し始めると、彼らが「ンガベ語は少しはわかるが、ここにはンガベはいない」と言った。みんなブグレだった。私は嬉しかった。コマルカの外側にブグレのコミュニティが組織され、統治機関や議会を持っていたのだから。カロボボラ川とグアサロ川間のグアバリから海岸地方までがブグレのコミュニティだった。もちろん、もっと向こうのベレン川まで、いやもっと遠くにはンガベとブグレの共同のコミュニティもある。

なぜこれらのコミュニティはコマルカの外にあるのか。それは政治的・経済的な理由からだ。サンタ・フェの有力者たちはこの土地に「インディオ」を住ませたくなかったのだ。

まだ、ここには水力発電所建設の「圧力」はかけられていなかった。というのは道の状態が大変悪く、時には途切れていたからだ。しかしこの地域の可能性は甚大で、商売人達が「我々のもの」のことを知っているのは確実だった。

## 2010年水力発電所が来た

暗闇の中で働き続ける巨大な密蜂の羽音のようなブーンという音がひと晩中聞こえている。チャン75水力発電所建設のため、昼も夜も休みなく走り回るトラックの音だ。私は友人の家に泊まっていたが、このバジェ・リスコ（ボカス・デル・トロ）の人々の生活の激変を考えると、ほとんど眠れなかった。

この住民は、まさに天国のような土地に住んでいた。（たどり着くのは困難だったが）大きな川の側にバナナやカカオ畑、豊富な木材資源があり、狩猟や

漁業が営まれ、あらゆる作物がとれた。今は立派な道路が通ったが、トラックの群れやセメントの山、高いコンクリートの壁—ダム—に悩まされている。これらは、今はまだ住民には想像もできない、多大な影響をもたらすだろう。

それで畑はどうした？ 「作るのをやめなければならなかった。必要なものはすべて彼らが持って来てくれる」。コミュニティは？ 「どこかへ移されるらしい」。こんなうるさい音にどうやって一日中耐えてるんだ？ 「……」。それでここに電気がくるの？

「さあ、わからない」。これらを受け入れたのか？

「彼らはたくさんのかを約束した。でも……」

コマルカの外にあるコミュニティは、土地所有権の証書の発行を申請したが、そこが国立公園（パロセコ森林保護区）だという理由で却下された。しかし当時の政府は、同じ国立公園内のかかなりの広さの土地を水力発電の会社に与えていた。

2010年10月、私は情報を集めながら歩きまわっていた。地名を尋ねると「バランコ・アデントロ」と彼らは答えた。近くにコスタリカとの国境がある。カトリック教団のグループと一緒に聖餐式をしよう。学校や情報センター、チャペル、カリタスのサロンなどに使っている家に集まった。私はンガベ語で彼らに話し始めた。初めは、ロシア系アメリカ人が彼らの言葉で話すのが珍しいらしくみんな笑っていた。全員ンガベの人達だった。約200軒の家があった。彼らはバナナ園で働いているか、かつて働いていた人たちで、仕事や勉強のために山を下りてきていた。もちろんコマルカには属していない。

## 2011年 抗議と弾圧

2月、私たちはトレ（チリキ）で、ンガベ語を学びンガベ文化についての知識を深めるワークショップを開いていた。しかし私たちの気持ちはおちつかなかった。前日にサンフェリックス地区で弾圧があったから

だ。ンガベの人達はこの数日間、ある鉱山法に対する抗議活動をしていた。その法律は、コマルカを中心地区で金や銅の採掘をする時、事前に知らせなくても合法とする、というものだ。すでに1人殺され、逮捕者や負傷者も出ていた。

カトリック教会の仲裁で、コマルカでは鉱山の開発はせず、水資源と森林資源は守られるという合意に達した。だが、それとは別に「特別法」というものを交渉することになってしまった。

## 2012年 もうひとつの道

2月8日から、カトリック教会の仲介で、何人かの証人を立て、政府と先住民の「対話」が始まった。だが信じられないことに、対話は「みんな」がカーニバル、—パナマでは最も厳粛な制度—参加できるようにと中断された。先住民はこの間にコミュニティに集まり、その他の者は国会の前に徹夜で座り込んだ。

家族や友人を殺傷し女性をレイプしたのに謝罪すらしない連中と、事件から1カ月にもならないのに交渉のテーブルにつくのは大変難しいことだ。

対話は、互いが敬意を払って公平な立場でなされなければならない。政治的なものも含め、文化的な互いの相違点を受け入れるという態度で参加するべきだ。対話の基本的な目的は、すべての人々に豊かな生活をもたらすことであるべきだ。

これらのプロセスから何が生まれるのだろうか。楽観的にならないとしても、「別の道」が見えてきたのは確かだ。それは、たとえ小さくても、尊敬と正義に満ち、異文化が交流する多民族社会実現のための活動拠点の建設だ。

1989年7月、ボリビア先住民はその宣言の中で「我々は愚かなほど長い間沈黙してきた」と言った。パナマの先住民はもうこれ以上沈黙できないし、するべきではない、そしてもちろん、彼らはそれを望んでいないと私は思う。（大西裕子訳）

Envio Digital 2012年3月  
<http://www.envio.org/ni/articulo/4490>

# サルバドル難民と四国の山村にみる 自立の思想と実践

藤井満

「戦争をみたい」と1988年から89年にかけて中米諸国に滞在し、02年までほぼ毎年訪問した。92年から2年間と02年からの3年間、新聞記者として訪れた愛媛の山村は、平成の大合併下「さだめじゃ」といったあきらめの言葉が蔓延していた。農産物の輸入自由化で農林業が壊滅し、頼みの綱だった役場も合併で消える……。そんな様子を目にしたとき、エルサルバドル難民の姿が頭に浮かんだ。圧倒的な軍の暴力を前にしながら「さだめ」とあきらめることなく、なぜたかいつづけられたのか。彼らから学ぶべきは、「さだめ」を乗り越える思想にあるのではないかと。

## 難民の出自

今回取り上げる難民は、ファラブンドマルチ民族解放戦線（FMLN）の基盤だった北東部モラサン県の人々だ。81年前後の軍の弾圧から逃れた8千人が、隣国ホンジュラスの国境の村コロモンカグアのキャンプに81年から90年まで滞在していた。

ホンジュラスの首都テグシガルパからコロモンカグアまでは、バスで約11時間かかった。村中心部から5キロほど歩いて軍の検問を抜け、トタン屋根が連なるキャンプに入った。

バイオリンやギター、靴、陶器……生活必需品の大半は手作りしている。「おもちゃ作り教室」では、廃材でつくった車の玩具をかかげた子が「ボクが色をぬったんだ！」と得意げに説明した。2年前にタイのカンボジア難民のキャンプで、うつろな表情の子を見ていたから彼らの元気さは意外だった。

難民の多くは零細農民で集団生活の経験はなかったが、援助食糧を数家族にひとつ配られた大鍋で共同で調理するうちに次第にグループが形成された。

カトリック系NGOのカリタスなども組織化を助け、女性差別の克服に力をいれた。主婦が毎朝トウ



モロコシをひいて主食のトルティーヤを焼くかわりに、これを共同の「工場」でつくることにした＝写真。女性を家事労働から解放するためだった。自動車修理工場や、家具や靴の工房など、さまざまな部署の責任者の過半数を女性が占めていた。

## 文字を知る意味

「俺たちは貧乏百姓で、旦那衆とは生まれがちがう」「殺されたってどうしようもない」といったあきらめを克服するため大きな役割を果たしたのは識字教育だった。

出国当初、識字率は15%程度だったが、小学校や成人学級で識字教育を進めた結果、最終的には9割の人が読み書きの能力を獲得した。

9歳で難民となったシクスト・ビヒルは、小学3年までキャンプ内の学校に通った。「松の木の下でバナナの葉のノートで勉強した。小学校3年がおわると靴の工房で働いた。その後は…（後述）」。5歳で難民になったホセ・マルケスは6年間小学校に通い、14歳から成人学級で大人に読み書きを教え

た。「難民になったから本も読めるようになった。キャンプは学校だった」。帰国後、教師になった。

キャンプの識字教育はカリタスなどのNGOの協力ではじまり、ホセ・マルケスのように難民のなかから教師が養成され、最終的には350人の「裸足の教師」が生まれた。難民の出身地であるモラサン県北部の教師数が十数人だったから、キャンプの教育の成果の大きさがわかるだろう。

こうした活動を支えたのは、ブラジルの教育学者パウロ・フレイレの思想だった。

フレイレは、貧しい農民の識字教育に携わるなかで、対話に基礎をおく独自の手法を編み出した。識字教育では生活に根ざした「生きた言葉」を用いる。難民にとっての「生きた言葉」は、たとえばrefugiado（難民）という単語だ。e u i a oという母音をすべて含むから、子音+母音という形で表記するスペイン語の基本を学ぶのに最適である。

自分たちが実感できる単語で読み書きを学び、生活実態や思いを表現する力を身につける。それによって現実を理解し課題を把握する力を育む。

フレイレは、貧しい人々に蔓延する「しょせん俺たちは」という宿命論を「沈黙の文化」と呼んだ。これを打ち破る教育を「課題提起型教育」と名づけ、従来の「銀行型教育」と峻別した。「銀行型」は不動の世界に人間の側を適応させようとするから人々の創造力を抑圧する。その方法は、教師から生徒への知識の詰め込みだ。「課題提起型」は、世界を変化しつつある現実だと認識する。抑圧状況に対してあきらめるのではなく、世界から自らを一度引き離し、世界を批判的に観察することで課題に気づかせ、現実を変革する力を養う。そこでは、教師が生徒とともに学ぶ対話的なスタイルが採用される。

難民キャンプではとりわけ成人教育でこの教育方法が効果を発揮した。地主による搾取を当然と思いつこんでいたのが、貧乏人にも「人権」があることや、不平等な土地所有が貧困の原因であることを

知った。自らの苦難の経験を記録・発信することで、教会やNGO、人権組織とつながっていった。

## 組織の力

軍が実質的権力をもつエルサルバドルから逃れた難民の大半はFMLNを支持している。ホンジュラスの親米右派政権は難民の左翼思想が周辺住民に「伝染」するのを恐れた。

ホンジュラス軍は24時間キャンプを包囲し難民の外出を許さない。81年当初、コロモンカグアを含め4つのキャンプが国境沿いに点在していたが、コロモンカグアをのぞく3カ所は国境から離れた地区に移動させられた。難民とゲリラの接触を断ち、国境地帯を軍事化してエルサルバドル軍と共同でFMLNに圧力をかけるためだった。

ホンジュラス軍はコロモンカグアの難民にも「基地をつくるから去れ」と要求する。難民は拒んだ。せつかく築いた生活基盤を失うことになるし、戦火が見えず危険を実感できなければ個別帰還を選ぶ人も増え組織が弱体化する。そしてなにより（当時彼らは否定したが）FMLNとの連携が切れてしまう。

立ち退きを拒むキャンプに、ホンジュラス軍はパトロールと称して踏み込み、「ゲリラ」との理由で男たちを連行する。89年1月現在、死者43人行方不明33人を数えていた。

88年4月、農作業中の63歳の男性がホンジュラス軍に射殺された。難民たちは、軍が近づくと笛で合図し、500人が座り込む体制を整えた。以後、軍がキャンプ内に侵入することはなくなった。

力を合わせれば軍にも対抗できるという経験は、組織への自信を深めさせた。88年6月には食糧の配給増をもとめるハンストを組織し、トルティーヤ1日3枚から5枚に増やさせた。「団結とか組織とか以前は考えたこともなかった。キャンプは私たちの学校です」「平和が来たら、ここで得た技術を生かして祖国を発展させます」

「祖国」というとき、彼らは遠くを見る目をする。だが、ほこりっぽい地肌とわずかな樹木しかな

い閉鎖的なキャンプは若者にはつらい。キャンプ生まれの世代が多数を占めるようになり、「祖国」を思う世代と、祖国より自由を求める若者とのギャップも生まれつつあった。

## 帰国へ

ホンジュラス政府は「国境から離れたキャンプへの移転か帰国」を求め、難民は「帰国したら殺される」と拒んでいた。だが難民たちは89年5月、「帰国」へと方針を転換する。3月のエルサルバドル大統領選で右翼ARENA（民族主義共和同盟）が勝って内戦が長引く可能性が高まり「傍観者ではなく祖国のたたかいに参加しよう」と決断した」と当時のリーダーは話す。

エルサルバドル政府は、個別バラバラに出身の村に帰還するよう求めた。難民側は、軍から身を守るため全体がまとまって帰還することや、帰還地が軍に包囲されることを防ぐため、首都サンサルバドルとの自由な往来の保障を要求した。

帰還先のメアンゲラ地区は、政府軍とFMLNの支配地域の境界トロラ川よりわずかにFMLN側に入った地域にあり戦略的に重要だった。難民は、サルバドル国内や欧米のNGOと連絡をとりながら、サルバドルとホンジュラスの両政府と交渉を重ねた。

FMLNの大規模攻勢の影響で交渉が行き詰まった89年11月、難民は実力行使にでる。午前7時、712人が軍の検問に押しかけ、「私たちは帰国する！」と連呼した。兵士は威嚇発砲したが、外国人が付き添っていたため実力行使にはいたらず、約1時間後に検問を開けた。

しばらくついできた兵士は、国境の手前で引き返した。「(サルバドル側の)サンフェルナンドまで来てみる！」と難民たちははやしたてた。約5時間後にサンフェルナンドに到着すると約500人の住民が音楽と食事で出迎えた。上空にはエルサル軍のヘリコプターが旋回していた。その後交渉は一気に進み、90年2月に正式に集団帰国が実現した。

新しい村はセグンドモンテス共同体（89年に虐殺された中米大学人権問題研究所長セグンド・モンテス神父の名）と名づけられた。欧州の専門家の助言で、学校や図書館、サッカー場などの公共施設を取り囲むように住宅を配置する都市をデザインした。「エルサルバドルの復興モデル、第三世界の農村発展のモデルになろう」と希望に燃えていた。

## 生活綴り方運動

表現能力を高めることによって宿命論からの脱却をはかる思想は日本にも存在する。

敗戦直後の山形の山村の中学で、無着成恭が貧しい生活を客観的に見つめる作文を書かせた「山びこ学校」はその典型だ。「現代日本の思想」（久野収・鶴見俊輔）によると、「生活綴り方」の源流は京都府福知山市の小学校教師、芦田恵之助にさかのぼる。水害の記録をつづって寄付を集めたのをきっかけに、子どもが自由に課題を選んで作文を書く形を編み出した。それが「花」「国旗」といったテーマを先生が与えて定型の作文を書かせる明治以来の国語教育から脱却をはかる運動に発展した。

戦時体制のなかでリーダーが弾圧対象となって運動は壊滅するが、敗戦とともに全国各地で再生し、封建的な因習を打破し、生活を改善し、民主主義を実現するツールとして活用されることになった。

## 愛媛の山村で

表現によって「宿命・さだめ」を「課題」に転化する思想は、愛媛県の山村にも影響を及ぼした。

仁淀川上流の川瀬村（59年の合併で久万町、04年の合併で久万高原町）の畑野川国民学校の校長は、世の中の変化やGHQの施策を村民が学ぶ場を設けるため、47年に「教育会」を結成した。

席次は出席の順とし先輩後輩の隔てをしない▽必ず発言する▽人の意見をよく聞く▽なぜだろうという疑問を解く▽物事を批判検討する……という同会のモットーは、戦後民主主義を色濃く反映するとともに、生活綴り方の思想とも酷似していた。



川瀬村は4つの公民館を中心に社会教育を展開し、家族の民主化や生活改善、健康管理といった分野の学習会が生まれた。当時の村長は元教師で、社会教育・職員教育に力を注いだ。職員に対して「勉強せい。理論もアウフヘーベンが大事だ」と口癖のように説いた。

59年の合併で川瀬村はなくなり公民館運動は下火になるが、「学び」と議論を尊重する気風は合併後の久万町にも受け継がれる。

61年の農業基本法で、町村ごとに中心となる作物を選ぶ「選択的拡大」路線を政府が示すと、久万町は各地区から20人の篤農家を選び、愛媛大の研究者を講師とする研究会を発足させる。

当時、久万の農家の8割は田畑と林業の複合経営で農業粗生産額の7割は米だった。議論を重ねるなかで、山林経営と畜産の比重を高め、米とならぶ産業に育てる方針を定めた。この決断によって、久万は後に林業先進地として注目されるようになる。また、稲作を省力化し浮いた労力を山林や畜産にまわすため、機械が入れるように整備した田が、後に都会の市場で評価される「久万の桃太郎トマト」を生産する基盤となった。

現場の農民をまじえて議論を重ねることで地域の課題を抽出し、外部の研究者と連携して方向を定める過程はサルバドル難民の取り組みと似ている。

川瀬村で公民館運動を担い、久万町で農地の基盤整備を担当した渡部鬼子雄氏は、83年に町助役に就任すると、「地域づくり」をテーマにした小論文の宿題を年末年始に全職員に課した。文章に表現することで職員を地域課題に向き合わせるの「生活綴り方」の発想だ。

こうした「人づくり」の積み重ねが、木造美術館建設や三セクの林業会社設立……といった90年代のユニークな町おこしの基盤を形づくった。

もう1つ、高齢化がすすむ現代の山村の例をあげておこう。内子町の下立山地区は山の中腹に約60戸



が散らばり、谷間の国道のバス停から、徒歩で1時間かかる家もある。

農協を退職した高須賀忠篤さんは01年に地区の老人会長に就任すると、クロッキー大会などの役場の下請け行事ではなく、地区の課題にとりくもうと考えた。

車がなく足が不自由な高齢者は、町の中心に出るのに片道1600円のタクシーに乗る。バス停から家まで1時間半かけて歩く75歳の女性は「年金は2カ月で7万円もない。バスは午前と午後1便ずつしかないから、町で食事しないといけん。買ったら500円も余分にかかるけん、お弁当とゲンノショウコのお茶をもって出ます」と語る。そんな身を切るような思いをしながら「生まれ時が悪かった」とあきらめる老人たちが高須賀さんはもどかしかった。

まず、話しあう場を設けた。「巨額の赤字をだして町営バスが走る所もあるんぞ」と他地区と比べることで、「なんぞなるならやってほしいのお」という声が出てくる。そうした声をまとめて、町長も参加する会合で発表すると、「プロジェクトで検討します」と役場は答え、後に1地区4人以上の申し込みがまとまれば町有ワゴン車を走らせる「福祉バス」の試験運行をはじめた。

下立山では、「買い物や通院の足がほしい」「みんなで話す機会がほしい」という思いを実現するため、月2回送迎つきで食事やりハビリを楽しめる町の「ミニデイサービス」＝写真＝に着目した。普通は町が民生委員を通して個別に老人を誘うが、下立山では老人会が組織的に参加を募った。その結果、

ミニデイは老人会の会合の場になった。ミニデイのついでに買い物や通院もこなすようにした。

エルサル難民と同様、表現しあうなかで「さだめ」を「課題」に転じて集団の力を生み出した。ここでは説明しないが、高須賀さんが高齢者の宿命論に向きあえたのは、戦後の青年団・公民館運動の体験者の影響を、農協運動を通して受けていたためだった。（詳しくは拙著「消える村生き残るムラ」）

戦後直後に一世を風靡した生活綴り方運動は文部省に疎まれ、文部省の指導要領にもとづく「作文派」が主流になっていく。生活綴り方が、表現の裏にある生活の指導を重視したのに対し、作文派は、表面的な表現技術の指導を強調した。「課題提起型」から「銀行型」への逆行である。公民館運動などの農村の自立運動も、自民党一党支配が確立し、補助金を武器に政治家が地域権力を牛耳るようになるとともに失速する。

だが、補助金を権力の源泉とするボス支配が財政危機によって行き詰まった今、「あきらめ」脱却を目指す生活綴り方的な思想が役だつ例は、内子だけでなく各地で生まれている。

## 難民のムラ その後

内戦終結6年後の98年、帰還難民のつくった「セグンドモンテス共同体」を訪ねた。一部が出身地にもどったため、人口は5千人弱になっていた。

帰国直後、海外からの援助で、靴や家具の工場や大規模な養豚場などを設けたが、その多くが失敗した。たとえば靴は、安価でデザインがよい中国製品に太刀打ちできなかった。家具工場も大規模養鶏場もつぶれた。

カネにならないコミュニティ活動も停滞する。キャンプ時代は、体が不自由な老人が公共施設のハンモックで1日中すごし、利用者がきたら鍵を開ける役割を担うことで「皆に役立っている」という生き甲斐になっていた。ところが食糧配給がなくなり

(上)難民キャンプの歓迎音楽会。右端のコントラバスの少年の10年後が(下)の右端。ほぼ同じ場所で撮影



個々人で食い扶持を稼ぐようになり、コミュニティ活動に時間を割く余裕はなくなった。

一方、難民キャンプで養成された教師の一部は正規の教員資格を認められた。キャンプで獲得した技術をもとにコミュニティラジオ局や音楽学校も開かれた。

ちなみに前述のシクスト・ビヒルは、難民キャンプの靴工場で働いたあと政治教育を受け、13歳で友人15人とともにゲリラになった。特殊部隊として従軍中に負傷し、48人の同志とともにメキシコ大使館に押し入ってキューバに亡命した。和平合意後に164人の仲間と帰国した。

98年当時、26歳のシクストは公認会計士をめざして勉強していた。元ゲリラや元難民の若者は、ジャーナリズム、会計学、経営……と、それぞれの夢をめざしていた。

市場経済に翻弄され、難民時代に思い描いた理想のムラの実現はままならない。だが「学び」の気風や国内外の専門家とのつながりは根づいていた。

半世紀前の思想が、今なお、経済のグローバル化による過疎・高齢化に対抗するツールとして機能している日本の山村の姿とだぶってみえた。

# 「マヤの精神世界が認められて嬉しい」

ロサリーナ・トゥククさんに庭野平和賞 松枝愛（翻訳家）

グアテマラの人権団体「連れ合いを奪われた女性たちの会」（コナビグア）のロサリーナ・トゥクク＝ベラスケスさん（55）（以下敬称略）が、第29回庭野平和賞の受賞を機に、2012年5月に息子カルロス、娘インチェルを連れて、5度目の来日をした。

私は5月15日に東京でインタビューをした。以下は一問一答。（松枝愛＝翻訳家）

—現在コナビグアではどんな肩書きで仕事をしているのですか。

経理責任者をしています。資金は主にスペイン、ノルウェー、ドイツ、ベルギー、米国や、国内の教会女性団体などの姉妹組織から受けています。現在日本からの援助はありませんが、今回の受賞を機に平和に向けた協力関係が復活すると思います。

—資金は十分ですか。

残念なことに、この10年で援助は激減しました。平和が定着したグアテマラに援助の必要はない、という理由からですが、暴力、飢餓、失業、治安の悪化は特に深刻化しています。それが平和の訪れを遠ざける要因になっています。

—コナビグアが行っている活動（先住民権利保護、二言語教育、環境保護、女性の能力開発、法的な女性の権利強化、識字教育など）は、ほかのラテンアメリカでも同様の問題が見られますね。権力者による迫害は、未だ存在しますか。

あります。現政権は事実上の軍事政権（大統領は退役将軍）ですから、再び軍事化が進んでいます。また、義務徴兵制を復活させようとしています、それは和平合意に違反しています。政府が推進するエコツーリズムも、マヤ聖地への侵入を図り、これも違法です。私たちの精神世界や先住民社会が脅かされることになります。

—2011年の大統領選挙（9月11日実施、11月6日決選投票でオットー・ペレス＝モリーナが当選）



で、前回に引き続きリゴベルタ・メンチューの得票が3%と低迷した理由は。

我々は、過去の選挙ですっとリゴベルタ候補を支持してきました。政治運動のウィナクにも大きな支援をしていました。票は集められませんでした、参加に意義があります。あと一つ重要なのは、候補者の届出期間中に選挙最高裁が突然制限を設けたため、私たちが擁立した候補者が登録できませんでした。期限が迫っていたために、控訴も叶いませんでした。今選挙でも、たくさんの政治操作があったのでしょう。ノーベル平和賞受賞者であるリゴベルタを誹謗中傷する動きがありましたし、票を集めるために、資金力のある政党が大金を宣伝に投入することも多々あります。また、この国の社会が依然男性優位主義（マチスタ）であり、人種差別社会（ラシスタ）であるので、女性が候補者になるのは難しいですし、資金力、政治権力のある政党に対抗するのは困難なのです。

—前大統領アルバロ・コロンの妻サンドラ・トレスが候補者として承認されていれば、彼女は勝利したでしょうか。

疑問が残るでしょうね。なぜなら、まずこの国には男性優位的な行動があります。そして都心部が最終的な決定権を握っているのです。つまり、都市圏は人種差別的で、男性優位主義的ですから、女性の



立候補を許す土壤がないのではないかと思います。彼女は人気もありますし、支援者もたくさんいます。しかしそういった支援者たちが皆選挙登録されているかは疑問ですから。

—マヤの男性もマチスタなのですか。

そうですね。マヤの文化において「いいえ、男性優位主義は存在しません」と言ったら嘘になります。例えば、各自治体に設けられている開発協議会にも、女性の参加はほぼ見られません。

—グアテマラ国にはなくて、マヤ民族にはある「価値観」が何かあれば、教えて下さい。

マヤの中には、〈均衡（エキリブリオ）〉という価値があります。あらゆる変化、発展、転換に必要なものです。均衡ともう一つは男女の参画です。例えば、マヤ社会の政治の場には、男性も女性もいますし、若者も少年少女もいます。排除される人はありません。先住民の権力構造のレベルでは、少しずつ女性も席を埋めてきてはいます。既存の権力構造の中で、ソロラに女性代表者（ドミンガ・バスケス：2004-2005年にソロラ先住民首長）が出ました。ここに至るまでどんなに時間がかかったことでしょう。今年に入ってからも西部の権力機関に女性が就任しました。小さな一歩ではありますが、前進です。先住民社会の中では、女性を尊び、女性の経験を重んじているのです。

さらに、女性の祈祷師が非常に増えました。20年前は、ほぼ男性で占められていましたが、今は女性がとても多い。一方で、男女それぞれの役割があります。例えば女性の智慧は、織物や伝統療法で発揮されます。これらの知識は女性たちが率先して学んでいるものです。彼女たちの口承による教育は、確かなものです。私たち特有の文化では、前進がある

のです。しかし、国家的構造のレベルになると、先住民社会というのは、完全に不平等な位置づけにあります。

—ほかの国々の先住民族との連携状況は？

先住民族の能力開発は中米レベルで、エルサルバドルやコスタリカ、ホンデュラス、ニカラグアの少数コミュニティと連携していますが、数の面で限界があります。だからこそ、大陸レベルの努力があるのです。中米という枠を越えて、農民／文化／学術分野での先住民族のフォーラムがあります。そこには世界中の先住民族が集まります。約3億人の先住民が世界にいる中、私たちはそれぞれの民族の生命や文化について語り合います。私が考えるに、先住民はまだ〈資源（レゼルバ）〉なのです。人類の資源です。環境面でも文化面でも、大地と領土を守るという意味でも、〈人的資源〉です。

—最後に、庭野平和賞を受賞した感想を聞かせて下さい。

今回の受賞は、すでに知られている宗教だけでなく、先住民族にも独自の精神世界があるということを認めてもらえたことが重要です。社会も、先住民族による独自の精神性の表現を認めてくれることでしょう。我々はこれを宗教ではなく、何千年も前に構成され今に至る精神的表現と考えますが、私たちの精神性はいたって自然な形で発展してきて、宇宙のエネルギーと共にあります。

また、マヤの精神世界は、世界の変化に重要な役割を果たすと思っています。人類は常に困難な時代を生きています。自然な状態を受け入れ、大地やあらゆる自然を尊重することを人間が学ばば、それに対処することができます。

帰国後、ロサリーナは地元コマラパ市をはじめ各地で盛大な歓迎を受けた。庭野平和賞受賞に加えてリゴベルタのノーベル賞受賞20周年でもある今年2012年を、ロサリーナは新たな「出会い」の年だと位置づけている。

# アルゼンチン「人道に対する罪」を裁く努力 井上薫

1976年～83年の軍事政権時代にアルゼンチンで約3万人の一般市民が誘拐され、拷問の上、殺害された。この行方不明者達を生んだ人権侵害に対する裁判は、民政移管後も二つ恩赦法のために全面的に行われてこなかった。2003年ネストル・キルチネル大統領が就任直後に多くの軍部のトップを解任し軍部を弱体化した。その後この二つの恩赦法（命令服従法Ley de obediencia debidaと終止符法Ley de punto final）を廃止し、全国で人権侵害の加害者処罰への道を開いた。2007年キルチネル大統領の妻、クリスチナ・キルチネルが大統領に就任し、その改革路線を継承して2015年までに全訴訟を終わらせることを目標にしているが、裁判は関係者の高齢化を前に遅々として進んでいない。昨年ばかりうじて6つの判決が再調査されたにすぎず、66人の既決囚のうち43人しか完全な有罪判決を受けていない。

このような状況を踏まえて、控訴裁判所は裁判を迅速に行うために昨年末から改革をすすめてきた。そして今年2月には以下のような具体的な指示が出された。

- 事前の聴聞会を行なうことにより審理書類の読み上げ時間を制限すること（＜海軍整備士上級学校＞事件では読み上げに4ヶ月、カルロス・メナムと30人の被告に対する武器の密輸に関する裁判では6ヶ月もかかっている。）
- 被告の「健康上の理由」でプロセスが遅れないようにすることも提案している。保身のために裁判を長引かせないために被告陳述・最終弁論の時間を制限する
- また、被害者保護の観点から、辛い記憶を呼び起こす証言を被害者に不必要に繰り返させないために一度証言した場合はその後出廷せずに映像と録音によって再召喚とする。
- 不必要で形式主義的な遅延を回避するために、裁判への召喚、申請、証拠提出などは関係各部署が統合された方法で行う。

数字上では、民主政治に戻ってから人権侵害で有罪判決を受けたものは267人である。人道に対する罪に関しては593件の逮捕があった。その半分は一般刑務所に拘留されている：43パーセントは逮捕拘留され、残りは病院と保安軍隊の付属施設にいる。現在117人の未裁判の被告がいるが、彼らは今年口述裁判にかけられることが予想されている。また800人の被害者がまだ裁判にいたっていない。2011年に反響を呼んだ裁判では、軍事独裁政権の最後の大統領であるレイナルド・ビニョーネが人道に対する罪で懲役15年の有罪判決を受けたが、ビニョーネはこれに先立ち別件で二つの終身刑の判決が下されている。

## 日系アルゼンチン人と強制失踪

3万人に及ぶ犠牲者のなかには日系アルゼンチン人もいた。現在分かっているだけで16人（うち沖縄系は12人）だ。欧州系移民の被害者家族たちが本国を巻き込み責任追及を求める行動を起こしたのとは対照的に、日系人犠牲者の場合はそれを「身内の恥」として事実を隠してきた家族が多かったという。だが、最近になって事件の風化を恐れて真相を解明するための動きも出てきた。2010年には「日系社会不法逮捕・行方不明者家族会」が日本大使館の後援で日系人犠牲者の写真展「足跡残す者は消え去らない」を開催している。またスペインなど自国の法律で人権侵害の責任者を訴追しているケースがあるが、日本政府も原告となって責任を追及するよう要求する動きもある。が、日本大使館は国として司法制度上でできないとして、アルゼンチン政府に真相究明と責任者の処罰を求めているにとどまっている。

La Nacion（インターネット版）2012/01/13

Comercio y Justicia（同上）2012/02/29

朝日新聞（同上）2012/2/1

沖縄タイムス（同上）2010/4/12よりまとめ

## 連載第44回 『ラ米百景』

伊高浩昭（ジャーナリスト）

### 第62景 カルロス・フエンテスの思い出

1968年のメキシコ市は、メキシコ五輪大会開会を控えて大荒れに荒れていた。大学生と予科生（高校生）を中心に労働者と知識人が加わった、政治意識を持つ市民のうねりが、政治体制の変革を望み要求して連日、大学・高校キャンパス、市内のあちこちの広場、大通りを覆っていた。私は、そんなある日、高級住宅街にあった作家カルロス・フエンテスの邸宅に行った。学生運動指導者、知識人、ジャーナリストを集めた、「メキシコをどうすべきか」という議題に基づく討論会が開かれていたからだ。40歳になるかならないかのフエンテスは、長髪、長靴、ジーンズ姿で、壮年期のライオンのような風貌をしていた。彼の横には、詩人で作家のオクタビオ・パスの苦悩に満ちた顔があった。私はたまたま二人の前の席を与えられ、取材した。パスはインド駐在大使だったが、一時帰国し、祖国の状況に関与していたのだ（後に政府に抗議し、大使を辞任した）。

当時25歳だった私は、フエンテスの前で恥ずかしさを感じていた。前年、原語で読み始めたフエンテスの出世作『最も透明なる地域』（1958年／邦題「澄みわたる大地」2012年、現代企画室）を忙しさにかまけて投げ出して久しかったからだ。大部であるうえに難解だった。もし読了していれば、会合の終わりにでも、この作品について質問することもできたのにと悔やまれた。

今年出た邦訳書の書評を書くため読みつつあった5月半ば、フエンテス死去の一報が届いた。

愕然とした。83歳で死んだ作家から、「まだ俺のあの本を読んでいないのか」と、なじられているような気がした。私は、他の仕事を放って一気に読み終え、書評を書いた。なんとなく、ほっとした。この大作はメキシコ論であり、本質的にはメキシコ讃歌である。何で1968年の時点で読み終えていなかったのかと、ふがいない我が身をあらためて嘆いた。

準国葬級とも言える葬儀が挙行された。偉大な自国の芸術家や知識人に丁重かつ盛大に別れを告げるメキシコの習慣からすれば、当然のことだ。だが、「遺骨は、巴里モンパルナス墓地に入る」との遺言は意外だった。2年前に墓を手に入れ、先立っていた妻子は既にそこに眠っているというのだ。外交官の息子として生まれ、父親の勤務地を転々としたフエンテスはコスモポリタン、ボヘミアン、魂の放浪者であったのか。メキシコを作品であれほどまでにめぐりながら、永遠の寝所は巴里なのだ。このモンパルナス墓地には、メキシコ革命で追い出された独裁者ポルフィリオ・ディアスも眠っている。

外輪山に囲まれた海拔2400mの高原故に不完全燃焼のエネルギーの排煙が空を覆い、それを「工業化進展の象徴」と、当時の政府や財界は大真面目で誇っていた。それをフエンテスは皮肉って、公害まみれの巨大都市を「最も透明なる地域」と形容したのではなかったか。そんな質疑応答を、フエンテスとしたかったのだ。

月刊LATINA誌7月号（6月20日発行）に、5月来日したロサリーナ・トゥユク氏へのインタビュー記事、および『澄みわたる大地』の書評が載っています。いずれも伊高執筆です。

## 女性 Warmi

女性、働く女性  
体は小さくとも、あなたは大きい  
働くために生まれた  
仕事の中で、人生を終わる

美しい鳥のように  
あちら、こちらと微笑みながら  
家の中を整頓する  
何事もなかったように

夫を助け  
子どもたちを育てる  
お金がなくても  
鍋の中を一杯にする

あなたの手から渡されるパンは  
どんな飢えも救う  
あなたの優しい言葉は  
悲しみを和らげる

鉱山、農村、どこであろうと  
何をしていようと  
仕事をしながら乗り越え  
落ち込んでいるものをよみがえらせる



あなたのような人が、どこにしようか  
疲れを知らず、休まないで  
昼も夜も働き続け  
元気を失わない

したがって今日の日  
あなた達に敬意を表したい  
鉱山婦、洗濯婦、  
裁縫婦、料理婦  
すべての働く女性に対して  
敬意を表したい

作者：アリシア・テラン・デ・ディク  
詩集アイランブより  
訳：栗原重太

## 伸びやかに響くアンカシュの歌声

ペルーのアンデス音楽が次第に海岸地方でも演奏されるようになっていった20世紀半ば、その最も先駆けとなり、数多くのスターを輩出したのが、ペルー北部アンデスに位置するアンカシュ県の音楽家たちだった。ペルーのスイスと呼ばれ、青空に映える白峰が美しいアンカシュ県の音楽の魅力について今日は語りたい。

アンカシュは、ペルー最高峰のワスカラン山(6768m)に代表される美しい峰々が連なる風光明媚な山岳地帯であり、古くから多くの欧米観光客がトレッキングに訪れている場所でもある。カジェホン・デ・ワイラスと呼ばれる白山脈(コルディエラ・ブランカ)と黒山脈(コルディエラ・ネグラ)の間にある長い回廊盆地に町々が点在している。その中心となる県都が高度約3000mに位置する人口約12万人のワラス市だ。また、カジェホン・デ・ワイラスで有名な町としては、町全部が一瞬で山崩れに飲み込まれてしまったユンガイが挙げられる。その埋まってしまった町のすぐそばに、ユンガイは新たに復興され、今も存在する。埋まってしまった町はそのまま公園になっている(銀行だけ掘り起こされたという噂も)。本当かどうか知らないが、ワラスの町が他の地方都市と比べて道路が広いのが、ユンガイの経験を受けて災害に備えた都市計画となったため、という話も聞いたことがある。

さて、ペルー・アンデス全土で演奏されているワイノだが、アンカシュ地方には、ローカルなワイノの亜種がある。チュスカーダと呼ばれるその

音楽は、ワイノに比べてより軽やかなアップテンポで、曲調も伸びやかだ。このチュスカーダを甘い歌声で歌うのがアンカシュ音楽の大きな魅力で、このアンカシュではたくさんのチュスカーダの名曲がワイノ以上に歌われてきた。また、アンカシュのチュスカーダは、ローカルな一地方の音楽形式であるにもかかわらず、数



多くの名曲が全国レベルでヒットした。アンカシュ音楽が全国に広く知られるようになったのは、アンデス各地から首都リマへの移民が増加し、リマでアンデス音楽が演奏されるようになった50年代以降のことだ。その先駆けとなったのは、エル・ヒルゲロ・デル・ワスカランやパストリータ・ワラシーナなどの綺羅星のような歌手

たちの活躍によるものだった。週末の娯楽としてアンデス移民たちに愛され、「民俗芸能劇場」と呼ばれたリマの野外劇場などで名を上げた歌手たちが、ラジオ番組やレコードの普及に伴い次第に全国区のスターへと成長していったのだ。アンカシュは、アンデス中部のフニン県と共に50年代に始まるアンデス音楽のポピュラー化に際して、そのもっとも先陣を切ったアンデス音楽の一つだった。ワイノ、チュスカーダ、パサカジェなどがその中心的なレパートリーだ。またアンカシュ県ポマバンバ地方で、バイオリンとアルパにより演奏される音楽チマイチは、バイオリンの妖艶な前奏から始まる非常に魅力的な音楽として、近年注目を浴びている。古くはエストレジータ・デ・ポマバンバという歌手が有名だったが、最近ではチマイチを売りにしたマリッタ・メサ=写真=がリマで活躍している。



さて、アンカシュ音楽といえば、超大物歌手が数多く登場した地域として枚挙に暇のない地域であるが、その代表的な歌手を紹介しておきたい。

まずは、エル・ヒルゲロ・デル・ワスカランの名前で愛された歌手エルネスト・サンチェスがいる。ペルーのアンデス音楽草創期に絶大な人気を誇った伝説の歌手の一人である。一説によると若い頃にはメキシコのランチェー

ラを歌っていたらしい。彼の張りのある伸びやかな声を聴くと説得力を持って聴こえるが、よく考えるとアンカシュの歌い方の特徴が朗らかに甘く伸びやかに歌うというもので、残念ながらこのような歌い方だからランチェーラを歌っていたという説を裏付けることはできない。CDと

して手に入るアルバムは少ないのだが、ぜひ機会を見つけたら聴いてみて欲しい。

そして、彼と同様、というか芸歴が長かったが故にそれ以上に忘れてはならないのが、ペルー・フォルクローレの女王と呼ばれたパストリータ・ワラシーナだ。彼女の歌声は、一度聴くと忘れることができないほど美しい。その明るい歌声が、ワイノのスタンダード・ナンバーである「エル・ボラチョ(酔っぱらい)」を歌う時には、パストリータ自身が酒場で酔っ払って絡むおばあさん役をこなしながら歌になると一転甘く歌い上げている。その声の転換にはただただ驚くばかりだ。

また、ユンガイさんという呼び名で日系人からも愛された、日系ペルー人歌手の大スター、プリンセシタ・デ・ユンガイ=写真=も忘れてはならない。大人になるまで自分が日系人であることを知らずに育ったという彼女だが、来日公演も行い日系人社会とペルー社会の架け橋としての活動も続けた最も有名な日系ペルー人アーティストの



一人だ。今なお多くのファンがアンカシュにいる。

甘く張りのある歌声で多くの人を魅了したラ・パジャスキニータも紹介しておきたい。彼女もおそらくそれほど活動期間は長くなかったとは思いますが、それでも今なお多くのファンがいるアンカシュを代表する歌手だ。もし機会があれば聴いてみて欲しい歌手の一人だ。

また、ゴリオン・アンディーナとフリヤ・カンポブランコの二大歌手を抱えていた楽団、ロス・ヒルゲロス・デ・ワルカンも素晴らしい楽団だ。エルネスト・サンチェスの芸名と混同してしまう（というかほとんど一緒に近い）が、まったく別の楽団なので要注意だ。また、インストウルメンタル楽団として、

コンセルティナを擁する珍しい楽団アンカシーノ・アトウスパリアなども特色がある楽団だ。

こうしたアンカシュ黄金時代の歌手や楽団を眺めると、芸名の多くが自然や牧歌的な風景から採られており、この時代のアンデス音楽に求められていたものが、美しき故郷であったことが見て取れる。50年代以降、故郷のアンデスを捨てて首都リマへと出てこざるを得なかったアンデス移民たちにとって、故郷は帰ること叶わない懐かしくも遠い場所となりつつあったのではないか。それゆえ、そうした移民たちの心情を掻き立て、熱狂させた歌手たちの名前は、羊追いのワラス娘(パストリータ・ワラシーナ)やワスカラン山のヒワ鳥(エル・ヒルゲロ・デル・ワスカラン)だったのである。

甘く美しいアンカシュ音楽は、他の地域のワイノとひと味も二味も違う爽やかさを持った音楽だ。ぜひ一度このアンカシュ音楽の魅力に浸ってみたいと思う。(水口良樹)

## アボカドソースの豚肉タコス

### TACOS DE CARNE DE CERDO CON SALSA DE AGUACATERNEADO

今回は世界中で知られている「タコス」を取り上げます。

タコスは、豚や牛、羊、鶏、その他の野鳥の肉、魚介類、豆や米、野菜、チーズ、ソーセージ、ハム……と無数の素材を使うことができます。なかには、トルティーヤのスープとインゲン豆、チーズを挟んだタコスもあります。塩とバターだけでシンプルに食べるのもよいでしょう。その素材のバリエーションの豊かさは日本の寿司のようです。

トウモロコシや小麦粉のトルティーヤは、タコスに独特の風味をもたらします。

メキシコにおけるトルティーヤの歴史は数千年に及び、古代文明から21世紀にいたるまで、多くの人々の主食でありつづけています。紀元前2000年のオルメカ人も、マヤもサポテカもテオティワカンもアステカもトルティーヤを食べていました。七面鳥やフリホールをトルティーヤに挟んだタコスは農作業の弁当にしていました。征服者たちもトルティーヤを口にしてタコスの味を楽しみました。豚やイノシシの脂で揚げたタコスも昔からあり、ユカタンには、トルティーヤの間にフリホールを詰めて揚げ、トマトやレタス、七面鳥の肉、ハバナネロなどをあしらうパヌチョス(panuchos)という料理があります。

私が子どもの頃、家族の誕生日や、独立記念日、その他のさまざまな祭りでタコスを食べました。祭にはタコスの屋台が並びます。

それぞれの地域や州に独特のタコスがあり、ユカタ



ンでは、伝統料理コチニタ・ピビル (cochinita pibil) のタコスが有名です。このタコスは、やわらかくて脂の少ない子豚の肉を使います。豚肉は、地面に掘った穴や、薪やガスのオーブンで焼き、香辛料の液体に漬けられています。

揚げた豚肉を使うタコスや、七面鳥の肉をモーレ(カカオと香辛料のソース)で味付けするタコスもあります。ベラクルス州では、魚介類や、茹でたあとフライにした豚肉のタコスが有名です。

さまざまな特徴をもったソースもまた、タコスに魅力的な味をもたらします。メキシコのタコスの種類は数えきれません。あらゆる人の好みや、あらゆる場にぴったりの、味や香り、色合いのタコスに巡り会うことができるでしょう。

今回のタコスは、トウモロコシのトルティーヤをつかいます。お口にあれば幸いです。

#### ■材料 4人分

- ・トウモロコシのトルティーヤ 16枚
- ・豚肉細切り 400g ・ピザ用のチーズ 135g
- ・オールドエルパソの“Taco Spice Mix” 1/2パック  
(同様の調味料30gでも可)
- ・レタス ・トマト中 2個 ・レモン 1/2
- ・熟したアボガド 1個 ・塩 コシヨウ ・水

#### ■作り方

1) トルティーヤが購入できないときは、トウモロコシの粉に水を加えて円盤状にして、フライパンで加熱する。油も塩も必要ない。

2) 肉を細く小さく切る。油を使わず、フライパンで軽く炒める。“Taco Spice Mix” 1/2パックと水1/2カップを加え、水がとんでソース状になるまで炒める。

3) レタスを食べやすいように細く小さく切る。

4) ソースづくり。アボガドの種と殻をとりのぞき、ペースト状になるまでつぶす。レモン果汁をしぼって加える。塩こしょうで味をととのえる。細かく切ったトマトを加える。

5) 平皿にトルティーヤを広げ、肉とアボガドのソースとレタス、最後にチーズをのせる。

6) 辛いのが好きならば、ハラペーニョを加えてもよい。

## パラグアイ 土地闘争で多数の死者—大統領罷免に発展

6月15日朝、首都アスンシオンから北東400kmに位置するクルグアティで、土地占拠した農民グループを退去させようとした200人以上の警察官と農民の間で撃ち合いになり、少なくとも17人（農民9人、警察官7人）が死亡、80人が重軽傷を負った。これは、コロラド党の元上院議員ブラス・リケルメの農園で起こったもの。

土地を占拠した農民運動の指導者は「問題は武力では解決しない。明らかに事態が悪化するだろう」と述べた。アムネ스티インターナショナルは警察が過剰な武力を用いることを直ちに止めるよう声明を出した。

ルーゴ大統領は事態を知り、軍隊の派遣を命じた。土地占拠の背後には全国農民連合と呼ばれる農民組織がある。土地闘争に関し急進的なグループとして知られ、パラグアイだけでなく、ラテンアメリカ全土で闘争をしている。パラグアイの真相究明委員会は、ストロセネル元軍事政権時代に国土の19%にあたる700万haの土地が不正に腹心のリケルメに譲渡されたことを明らかにしている。6月に発表された同委員会の報告書は、ストロセネルの死後も、1988年から2003年の間に約100万haの土地が違法に譲渡されていると報告している。軍事政権時代が終わっても右派政党によるコントロールが続き、土地問題が解決されないという背景がある。

この事件の直後、議会で大統領の責任を追及する弾劾裁判が行われ、上院・下院共に賛成多数で「職務の遂行が不適切」としてルーゴは罷免され、即日副大統領フェデリコ・フランコが大統領となった。これに対し、ルーゴは、弁護の準備に2時間しか与えられないなど手続きが不適正だったとしてこれを事実上の「クーデター」とし、米州裁判所に提訴するとしている。またこの決定に反対する人々が議会や中央公園に集まり抗議集会を開いた。ラテンアメリカ各国も直ちに反応し、アルゼンチン、エクアドル、ベエズエラ、ボリビア、コスタリカなどが、事実上のクーデターである、として非難声明を出した。また、中米議会（グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、パナマ、ドミニカ共和国で構成）も非難決議を採択。米州機構も懸念を表明。南米諸国連合（ウナスール）はアスンシオンに特使団を派遣し、加盟国が憲法秩序を乱したり、民主制が途切れたりした場合には、その加盟資格を停止する条項を発動する可能性も議論されている。

(BBC.MUNDO.2012/06/15、lanacion.com 2012/6/23、elNuevoHerald.com 2012/6/22より)

## アルゼンチン 最高裁が氷河保護法を発効

最高裁は6月3日、氷河及び周辺地域の環境を保護する氷河保護法を発効した。2010年に議会を通過したが、カナダの鉱山会社バリック社などが同法の適用で操業停止や露天掘り操業の制限など、計り知れない損害を受けるとして発効停止措置を提訴したため発効していなかった。判決は、まだ氷河の保護区域が確定していないことなどから企業にどれぐらいの損害が出るのか明らかでないとし、環境への影響を調査実施するとともに保護区域の範囲を確定するために測量ことを命じた。

フェルナンデス大統領は2008年、外国企業の投資が減るとしてこの法案を拒否したが、議会は2010年、バリック社がパスクアラマ鉱山開発に影響を及ぼすとして提訴し発効停止措置となっていた法案の最終案を承認した。パスクアラマ鉱山はアルゼンチンとチリにまたがり2009年に開発が開始された。世界最大の2国間プロジェクトとして知られ金・銀・銅の莫大な埋蔵量があるとされている。

スイスの環境コンサルタント会社は、同鉱山の開発は先住民族やその生活様式に打撃を与え、氷河が溶けることなどから経済開発共同組織（OCDE）や国際投資団体（CFI）の原則に違反していると指摘する。また土地所有が違法で、労働契約もずさんで、環境にも配慮がなく、鉱山労働者が16人死亡するなど、操業の利益が地元還元されていないことも指摘している。（noticiasaliadas.org 2012/7/11より）

去る6月16日、私が住む能登半島の輪島でレコムの総会が開かれました。その席で、ソんリサを縦書きから横書きにすることが承認されました。使い勝手が悪い縦書き対応ワープロソフトの使用をやめて省力化すること、フォントの種類や大きさを限定し統一感のあるレイアウトにすることなどを意図しています。「縦書きの方がよかった」とか「文字をもっと大きく（小さく）してほしい」とか、お気づきの点があればご指摘ください。改良したうえで、次の編集担当に引き継ぎます。

7月から9月まで、能登半島では毎週のように、巨大な灯籠が練り歩く「キリコ祭り」が催されています。能登の人々の信仰や民俗文化は、マヤのそれと似ています。マヤの信仰がロサリーナたちの活動を支えたように、能登人の信仰は、半島先端の珠洲市に持ち上がった原発計画を撤退に追い込む原動力のひとつでした。能登が一番熱い季節を味わいに来ませんか？（藤井満）

次回の「そんりさ」発送作業は 月 日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org)までアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.137 グアテマラ視察報告

Vol.133 グアテマラ総選挙

Vol.136 ボリビア先住民族政治と道路建設

Vol.132 ボリビア・ガソリン危機

Vol.135 あるコロンビア難民の死

Vol.131 エクアドル・アマゾン石油開発

Vol.134 グアテマラ・ニカラグア報告

Vol.130 中米に広がるナルコ

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

### レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・

FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

63万4855円

<グアテマラ基金>

54万7339円

(2012年7月現在)